

そう言っているか。

「

© 「われこそ死なめ。」(二八・16) という「翁」の気持ちは、どのようなものか。

「

「

2 かぐや姫は、人の世界と月の世界のそれぞれについてどのような気持ちを持っているか、整理せよ。

月の世界について

「

「

人の世界について

「

「

※解答例は最後にあります。

◆古文理解のチェックポイント

1 助動詞について

付属語で活用があるものが「助動詞」ですね。様々な語に接続して、過去や推量や断定や打ち消しなど様々な意味を添える働きがあります。詳しくは2学期に学習しますが、自分で調べたい人は、文法のテキスト52ページから参照してください。また、文法のテキストのオモテ表紙ウラ(見開き)に、助動詞の活用の一覧表があります。

たとえば、

「思ひしかども」(二七・3)の「しか」は、過去の助動詞「き」の已然形です。昔の人は過去を表現するのに「けり」と「き」

と二つの助動詞を使い分けていました。現在では「くた」しかありませんね。どのような使い分けがあったのか、文法のテキストの六二ページで調べてみましょう。

「慣らひたてまつれり」(二九・三)の「り」は完了・存続の助動詞「り」の終止形です。「くてしまふ・くってしまった・くた」などと訳します。

「使はるる人も」(同・五)の「るる」は受身の助動詞「る」の連体形です。受身の訳は「くれる・くられる」はわかりますね。

「湯水飲まれず」(同・七)の「れ」は可能の助動詞「る」の未然形です。可能の訳は「くできる」ですね。「る」には「自発・可能・受身・尊敬」の四つの意味があります。

文のどの部分が助動詞かわかるようになることが、まずは大切です。

2 敬語表現について

敬語表現には、尊敬・謙譲・丁寧の三種類があることは、中学校でも習いました。古文の敬語表現は3学期に整理する予定です。自分で調べたい人は、文法のテキストの二二〇ページからを参照してください。敬語の種類を忘れていた人は、文法のテキストを読んでください。

さて、敬語表現を表す動詞には、それ自体で敬意を表している動詞と本動詞を補助する動詞と二種類あることに留意してください。

たとえば、

① それ自体が敬意を表す動詞

「まうで来たりける」(二八・三)、「まうで来むず」(同・七)で用いられている敬語「まうで」は、謙譲語「まうづ(＝参る)」で「参上する」の意味があります。

「なでふことをのたまふぞ」(同・二)の「のたまふ」は「言ふ」の尊敬語で、「おっしゃる」と訳します。

② 本動詞に付いて敬意を表す補助動詞

(1) 「泣きたまふ」(二七・一)の「たまふ」は尊敬の補助動詞です。「泣く」という本動詞を補助して尊敬の意味を添えます。「お
くになる・くなさる・くいていらつしやる」などと訳します。

(2) 「竹の中より見つけきこえたりしかど」(二八・14)、「迎へきこえむ」(同・15)、「遊びきこえて」(二九・3)の「きこえ」
は謙譲の補助動詞「きこゆ」の連用形です。

(3) 「慣らひたてまつれり」の「たてまつれ」は、謙譲の助動詞「たてまつる」の已然形(または命令形)です。

「きこゆ(聞こゆ)・たてまつる(奉る)・もうす(申す)などの謙譲の補助動詞は「しし申し上げる」とワンパターンで訳し
てください。多少、語調が変に感じられても、×にされることはありません。

(4) 「過ぎしはべりつるなり」(同・4)の「はべり」は「過ぎす」という本動詞を補助して丁寧の意味を添えます。「はべり」
は「あり・をり・はべり・いますがり」というおなじみのラ行変格活用の動詞で出て来た、あの「はべり」です。「はべり」単独
で「あり・をり」の謙譲語にもなります。「くです・くます・くごさいます」と丁寧に訳してください。

3 「参る(まゐる) || 参づ・詣づ(まうづ)」(二八・3)と「罷る(まかる) || 罷づ(まかづ)」(同・8)について

「参る」も「罷づ」もともに「行く・来」の謙譲語ですが、「参る」は身分の低い者が高い人の前へ「参上する」、「罷づ」は身
分の高い人の前から「退出する」と動作が逆になります。これが原則です。しかし、平安時代の後期からは「まかる」が「まゐる」
と同じ意味で使われるようになりました。「平家物語」や「方丈記」「徒然草」を読むときには、注意しなければなりません。

本日は、これまでです。文法はこまごまとややこしく、めんどくさいのですが、きちんと理解しないと古文を正しく理解でき
ません。すこしずつ、確実に、覚えていってください。

【解答例】

◆要点の整理

- 1 ①人目 ②月の都の人 ③翁 ④かぐや姫 ⑤湯水

◆読解

- 1 ①後に残される翁や姫たちが、深く悲しみ戸惑うにちがいないこと。

※「かならず心惑はしたまはむものぞと思ひて…」（二七三・4）、「さらずまかりぬべけれども、思し嘆かむが悲しきことを…」（二七四・7）というかぐや姫の発言に注意する。

②かぐや姫の、竹林から連れて帰ったころの、異常に小さかった様子。

（別解Ⅱ三寸ほどの大きさであったこと。）

③かぐや姫との離別を死別と同じような重さで受けとめ、わが子を失うくらいなら自分が死ぬ持ち。 だほうがましだという気

2 月の世界について…かぐや姫は、自分の故郷である月の世界に帰ることをたいしてうれしいとも思っていない。強く帰りたいと思う所ではない、と考えている。 思っていない。強く帰りたい

人の世界について…長い間暮らしてきて、翁や姫はもちろん、慣れ親しんだ多くの人たちと別れるのは悲しい。

※「いみじからむ心地もせず。」（二七五・4）に注意する。そこには実際の父母がいるのにもかかわらず、「かの国の父母のこともおぼえず。」（同・3）とも言っている。